



「杏林型ウェルネスツーリズム」の構想立案と実施およびその妥当性検証の研究

石井博之（保健学部）小堀貴亮 古本泰之（外国語学部）大久朋子（保健学部）北出恭子（杏林大学地域総合研究所客員研究員）

1. はじめに

我々は今まで各学部・学科がそれぞれの専門性を活かした取り組みが発展してきた。今回その取り組みの一環として、保健学部、外国語学部観光交流文化学科の教員が主体となり、「ウェルネスツーリズム」の推進に取り組むこととした。本研究におけるメンバーは健康寿命延伸と運動、栄養と運動、観光学、温泉の専門家で構成されている。そして静岡県東伊豆町、愛知県田原市を対象地域とし、JTB、近畿日本ツーリストなどと連携することとなった。

今年度は地方自治体や観光業関係者と協議を進め、今後の取り組みの方向性を検討したので報告する。

2. 現状報告と今後の計画について

今年度は主に東伊豆町や田原市の関係者と我々が協議をおこない、今後の方向性を検討した。現地調査実施は3月26日の愛知県田原市での1回であったが実現することができた。今後まだ検討の余地があるが、現時点のウェルネスツーリズムにおける個別の取り組み計画は以下の通りである。その全体像を図1に示す。

1) ウェルネスツーリズムに対する我々の取り組みの方向性について

①我々の専門性を活かしたウェルネスツーリズムの策定をすること。

荒川らによると、ウェルネスツーリズムとはヘルスケアアプローチであり、旅を通じて健康を基盤としたライフスタイルを統合的にデザインしていくための有効な縦断の一つとしている。しかし今までのウェルネスツーリズムやヘルスツーリズムは主に温泉活用を主体としたもの（スパツーリズム）が多い¹⁾。日本理学療法士協会も新しい取り組み、職域拡大の観点から理学療法士の「ウェルネスツーリズム」への取り組みを提唱し、その主な実践例として、「鹿教湯温泉」での取り組みが報告されている。また現在世界中で行われているウェルネスツーリズムのほぼ半数（47%）はスパツーリズムであるとの報告がある²⁾。我々の取り組みも日本の観光資源である温泉の活用と効果の検証は十分に考慮に入れる。さらにそれぞれの観光地の持ち味を活かし、我々の専門領域を活かして以下の要素をウェルネスとして加えていくこととした。

②誰もが受け入れられ、皆で楽しむことができる観光のあり方をそれぞれの地域で確立すること。

障がいや介護の必要性の有無、年齢、嗜好性などの多様性を考慮し、より多くの人を楽しめ、更に健康増進や幸福感を享受できる観光プログラムを構築することとした。

観光地、観光施設のバリアフリーとユニバーサルデザインの導入。まずはより汎用性のある評価手法の規格化から開始した。

③観光の過程で健康を享受し、その後の生活に活かせる体験ができる食事の提供。

食事を楽しむだけでなく、一つ一つの食材と健康への理解を促し、その後の生活に活かせるような経験ができることを目指すこととした。

④観光地の温泉以外のリソースも活用した複合型ウェルネスツーリズムの策定。

観光や温泉だけでなく、リクリエーション、スポーツ、マインドフルネス、リラクゼーション、文化活動など様々なその土地ならではのアクティビティの提供を目指すこととした。

2) 対象地域の特徴

①静岡県東伊豆町

静岡県賀茂郡東伊豆町は、伊豆半島東海岸中央部に位置する人口11,881人（2020年9月30日現在）、総面積77.81 k m²の温泉町である。伊豆半島創世記の痕跡と火山による複雑な地形は、世界ジオパークの一部を構成しており、ジオサイトとしても注目されている。気候は年間を通じて温暖で過ごしやすく、真夏においても極端な猛暑になることがほとんどないことから、山間部は別荘が建ち並ぶ避暑地となっている。

さらに、貴重な歴史文化観光資源も数多く存在し、ヘリテージツーリズムの舞台となっている。全体像を図2に示す。

②愛知県田原市

愛知県田原市は、県の南端部、渥美半島のほぼ全域に位置する、人口60,892、面積191.12km²の自然豊かな都市であり、農業・観光・工業・水産業などが盛んな地域として知られている。特に、市町村別でトップクラスの農業産出額を誇る。

トライアスロン、サイクリングをはじめとするスポーツツーリズムなどが盛んであり、世代を問わず多種多様な体験型観光を楽しむことができる観光地域が形成されている。全体像を図3に示す。

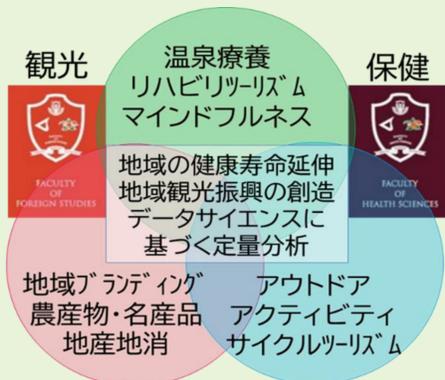


図1 現時点での全体像



図2 東伊豆町における全体像



図3 田原市における全体像

3. まとめ

今回報告した今後の計画は、2カ所の対象地域関係者と協議が始まったばかりである。また今年度は新型コロナウイルス感染拡大などの影響により、現地調査が困難であった。

今回は多種多様な取り組みの方向性を記述したが、全ての実現を目指しているのではない。今後は対象地域関係者や地域住民との連携を図りながら地域性を活かし、我々の専門性がウェルネスツーリズムに貢献できるように模索していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 荒川雅志(2017). ウェルネスツーリズム～サードプレイスへの旅～フレグランスジャーナル社
- 2) Global Spa & Wellness Summit (2013)